

「万葉の世界」―飛鳥とその周辺の歌

群馬県立女子大学 北川 和 秀

1. 舒明朝

天皇、香具山に登りて望国したまふ時の御製歌

○大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は
煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし国ぞ 蜻蛉島 大和の国は(一・二)

2. 斉明朝

中大兄 近江宮に天の下知らしめしし天皇の三山の歌

①香具山は 畝火ををしと 耳梨と 相あらそひき 神代より 斯くにあるらし 古昔
も 然にあれこそ うつせみも 孀を あらそふらしき(一・一三)

反歌

②香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に來し印南国原(一四)

③わたつみの豊旗雲に 入日見し今夜の月夜さやに照りこそ(一五)

右一首の歌、今案ふるに反歌に似ず。ただし、日本此の歌を以て反歌に載す。故に今なほ此の次に載す。また紀に曰はく、天豊財重日足姫天皇の先の四年乙巳に天皇を立てて皇太子となすといへり。

《参考》

④上岡の里。本は林田の里なり。土は中の下。出雲の国の阿菩の大神、大倭の国の畝火・香山・耳梨の三つの山相関ふと聞きたまふ。此に諫め止めむと欲して、上り來ましし時に、此処に到るすなはち關ひ止むと聞かして、その乗らす船を覆へして、坐しき。故、神阜と号く。阜の形、覆へしたるに似たり。(播磨国風土記 揖保郡)

3. 天智朝

額田王の近江国に下りし時作る歌、井戸王すなはち和ふる歌

①味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際に い隠るまで 道の隈 い積る
までに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 情なく 雲の
隠さふべしや(一・一七)

反歌

②三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや(一八)

右二首の歌、山上憶良大夫の類聚歌林に曰はく、都を近江国に遷す時に三輪山を御覽す御歌。そ。日本書紀に曰はく、六年丙寅の春三月辛酉の朔の己卯、都を近江に遷すといへり。

(井戸王の歌は省略)

4. 天武朝

壬申の年の乱の平定しぬる以後の歌二首

- ① 大君は神にし坐せば赤駒の匍匐ふ田井を都となしつ（一九・四二六〇）
右の一首は、大將軍贈右大臣大伴卿作れり。

- ② 大君は神にし坐せば水鳥の多集く水沼を都となしつ 作者詳らかならず（四二六一）
右の件の二首は、天平勝宝四年二月二日に聞きて、即ち岐に載す。

《参考》

天皇、雷岳に御遊しし時、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首

- ③ 大君は神にし座せば、天雲の雷の上に廬らせるかも（三・二三五）

右、或る本に曰はく、忍壁皇子に献るといへり。その歌に曰はく、王は神にし座せば雲隠る雷山に宮敷きいます

天皇、藤原夫人に賜ふ御歌一首

- ④ わが里に大雪降り大原の古りにし里に落らまくは後（二・一〇三）

藤原夫人、和へ奉る歌一首

- ⑤ わが岡の纏に言ひて落らしめし雪の摧けし其処に散りけむ（一〇四）

5. 持統朝

大津皇子、被死らしめらゆる時、磐余の池の陂にして涕を流して作りましし御歌一首

- ① ももつたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ（三・四一六）
右、藤原宮の朱鳥元年冬十月なり。

- ② ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たなびく春立つらしも

（一〇・一八一） 柿本人麻呂歌集

天皇の御製歌

- ③ 春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山（一・二八）

皇子尊の宮の舍人ら働しび傷みて作る歌廿三首（そのうち四首）

- ④ 高光るわが日の皇子の万代に国知らさまし島の宮はも（二・一七一）

- ⑤ 島の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君まさずとも（一七二）

- ⑥ 高光るわが日の皇子のいましせば島の御門は荒れざらましを（一七三）

- ⑦ 夢にだに見ざりしものをおぼばしく宮出もするか佐日の隈廻を（一七五）

明日香宮より藤原宮に遷居りし後、志貴皇子の御作歌

- ⑧ 采女の袖吹きかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く（一・五一）

藤原宮の御井の歌

- ⑨ やすみしし わご大王 高照らす 日の皇子 荒栲の 藤井が原に 大御門 始め給ひて 埴安の 堤の上に あり立たし 見し給へば 大和の 青香具山は 日の経の大御門に 春山と 繁さび立てり 畝火の この瑞山は 日の緯の 大御門に 瑞山と 山さびいます 耳成の 青菅山は 背面の 大御門に 宜しなべ 神さび立てり 名くはし 吉野の山は 影面の 大御門ゆ 雲居にそ 遠くありける 高知るや 天の御蔭 天知るや 日の御蔭の 水こそば 常にあらめ 御井の清水(一・五二)

短歌

- ⑩ 藤原の大宮仕へ生れつぐや処女がともは羨しきろかも(五三)

右の歌、作者未だ詳らかならず。

高市皇子尊の城上の 殯宮の時、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首 短歌を并せたり

〈長歌一首と短歌二首。そのうち長歌一首と短歌一首は省略〉

- ⑪ 埴安の池の堤の 隠沼の行方を知らに 舍人はまとふ(二・二〇一)

或る書の反歌一首

- ⑫ 哭沢の神社に御酒すゑ 禱祈れどもわご王 是高日知らしぬ(二〇二)

舍人娘子の雪の歌一首

- ⑬ 大口の真神の原に降る雪はいたくな降りそ家もあらなくに(八・一六三六)

6. 奈良時代および年代未詳

和銅三年庚戌の春二月、藤原宮より寧楽宮に遷りましし時に、御輿を長屋の原に

停めて廻かに古郷を望みて作る歌 一書に云はく、太上天皇の御製といへり

- ① 飛鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ 一に云ふ、君があたりを見ずてかもあらむ(一・七八)

神岳に登りて、山部宿祢赤人の作る歌一首 短歌を并せたり

- ② 三諸の 神名備山に 五百枝さし 繁に生ひたる つがの木の いや継ぎ継ぎに 玉かづら 絶ゆることなく ありつつも 止まず通はむ 明日香の 旧き京師は 山高み 河雄大し 春の日は 山し見がほし 秋の夜は 河し清けし 朝雲に 鶴は乱れ 夕霧に 河蝦はさわく 見るごとに 哭のみし泣かゆ 古思へば(三・三二四)

反歌

- ③ 明日香河川淀さらず立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらなくに(三二五)

上古麻呂の歌一首

- ④ 今日もかも明日香の川の夕さらず河蝦鳴く瀬の清けかるらむ(三・三五六)

⑤春されば 花咲きををり 秋づけば 舟の穂にもみつ 味酒を 神名火山の 帯にせる
明日香の川の 速き瀬に 生ふる玉藻の うち靡き 情は寄りて 朝露の 消な
ば消ぬべく 恋ふらくも しるくも逢へる 隠妻かも (一三・三二六六)

反歌

⑥明日香川瀬瀬の珠藻のうち靡き情は妹に寄りにけるかも (三二六七)

帥大伴卿の歌五首 (そのうち一首)

⑦わすれ草わが紐に付く香具山の故りにし里を忘れむがため (三・三三四)

或の日はく、昔二の男ありき。同一の女を娉ひき。娘子嘆息きて日はく、
一の女の身は滅易きこと露の如し。三の雄の志は平び難きこと石の如しといふ。
遂に乃ち池の上に彷徨り、水底に沈没みき。時に其の壮士等、哀顔の至に勝へずし
て、各々所心を陳べて作る歌三首 娘子、字を 纒児と曰ふ

⑧無耳の池し恨めし吾妹子が来つつ潜かば水は涸れなむ (一六・三七八八)

⑨思ひあまり甚もすべ無み玉襷 畝火の山にわれは標結ふ (七・一三三五)

譬喩歌 山に寄す

紀皇女の御歌一首

⑩軽の池の驕廻行き廻る鴨すらに玉藻のうへに独り宿なくに (三・三九〇) 譬喩歌

⑪さ檜の隈檜隈川の瀬を早み君が手取らば言寄せむかも (七・一一〇九)

雑歌・川を詠む

